

僕らの仕事

Miyaji LaVita Our Works

新世界 透明標本展

全国を巡る展覧会へ

経営開発室 経営戦略課長 菅野乃美

主管：株式会社高知新聞企業

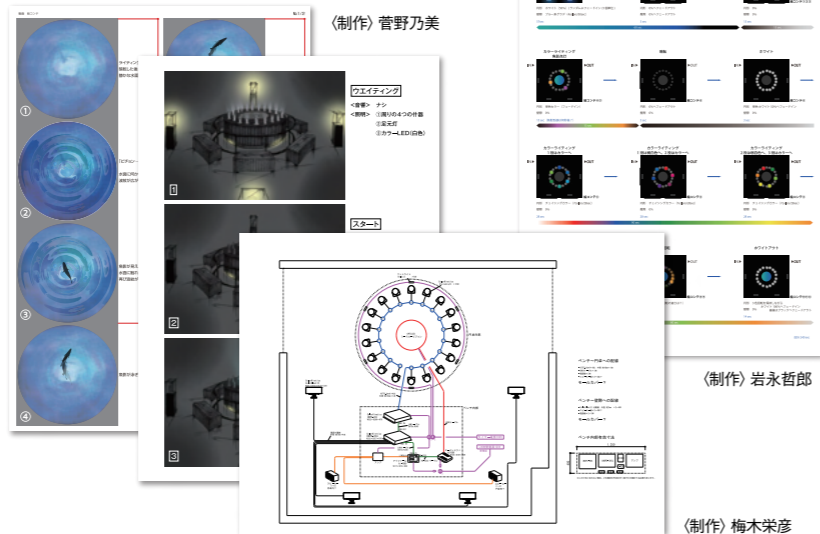
作家：富田伊織 氏



透明標本とは、生物の骨格を観察するために作られる標本です。たんぱく質を酵素で分解して肉質を透明化し、硬骨を赤紫、軟骨を青に染色します。もともと骨格標本にしづらい小さな生物の微細な骨格を立体的に観察するために確立された手法です。この透明標本を芸術作品へと発展させたのが、透明標本作家・富田伊織氏。

そして、この作品と出会い、大規模な展覧会へと昇華させようとしたのが、高知新聞企業の佐竹さんでした。

作品の美しさを最大限に引き出すために必要なのは照明だと考えた佐竹さんが、先輩に相談したところ、「照明なら宮地電機さん」という言葉が返ってきたそうです。



「せっかくのプロの皆さんの提案に口出しをして、つまらなくなってしまうのは勿体ない。宮地電機さんのコーナーを作るのはどうでしょう？ 僕に新しい世界を見せてください。」

高知新聞企業様からお声がけいただき、解剖学で使われる《透明標本》をアート作品にした展覧会にライティングに関わることになったのが、すべての始まりでした。この美しい透明標本をどう魅力的に見せるか？照明だけでなく、音や映像を連動させ、「静」の展覧会に「動」を取り入れてみよう。当時、広報・デザイン課にいた私は、インテリアデザイン課、高知支店技術センターと協働し、プランを練り上げて作家の富田さんにプレゼンテーションしました。そのとき、ドキドキしていた私たちに富田さんがかけてくださった言葉が、冒頭の一言です。

通常、全国で開催される展覧会は、海外や都市圏でパッケージされたものが巡回するのがほとんど。そんな中、高知で生まれた「新世界・透明標本展」はSNSでも評判が広がり、高知新聞企業様の営業力もあって、高知から全国へ巡回するという稀有な展覧会になりました。

2025年からは、徳島施設・ファクトリー営業課が新メンバーとして加わり、透明標本と光の波長の関係を体感できる『光Labo』という新コーナーを追加。ブラッシュアップを続けながら、全国の皆様に宮地電機の技術をご覧いただく旅を続けています。



開催実績

開催期間	会場(所在地)	来場者数(集客目標)
2017年7月22日～8月20日	高知県立美術館(高知市)	23,210人(12,000人)
2019年3月16日～4月7日	井上アイシティ21(長野県松本市)	15,383人(15,000人)
2019年7月13日～8月25日	TFU ギャラリーミニモリ(宮城県仙台市)	21,950人(18,000人)
2022年4月2日～5月8日	清水文化会館マリナート(静岡県清水市)	9,392人(15,000人)
2022年7月9日～8月28日	秋田県立美術館(秋田市)	15,145人(15,000人)
2023年7月15日～9月3日	熊本県立博物館(熊本市)	41,261人(20,000人)
2024年4月26日～5月26日	金沢21世紀美術館(石川県金沢市)	22,657人(18,000人)
2024年7月13日～9月23日	青森県立三沢航空科学館(青森県三沢市)	18,686人(15,000人)
2025年3月16日～6月26日	北九州市立科学館(福岡県北九州市)	14,170人(-)
2025年7月13日～10月5日	東広島市立美術館(広島県東広島市)	28,691人(15,000人)

コロナ禍の清水市での開催以外は、全て主催者の目標を達成できました。

金沢21世紀美術館では、能登震災後、人気の常設展は全て閉じており、観光客が激減した中での目標達成です。

北九州市立科学館では、春の展示会として、初の10,000人超えを達成。

熊本博物館での開催は、集客目標の2倍以上の来場者を記録し、同施設の新記録を樹立しました。これは、照明・音響・映像技術を活かした演出が高く評価された結果とも言えます。